

特集：レジャー・レクリエーション研究における基本書

## プログラム開発とその展開に関する研究分野から

坂口 正治\*

### From the Standpoint of the Research Field concerning with the Recreation Program Development and its Application

Masaharu SAKAGUCHI

編集委員会より依頼のあったテーマはレジャー・レクリエーションプログラム開発研究分野における研究動向と、研究に関わる基本書の紹介である。

プログラム開発を考えるにあたって、「プログラムとは何か」を正しく理解しておくことである。レジャー・レクリエーションプログラムは多岐にわたるものであるから、プログラムそのものの持つ特殊性をしっかりと理解しておくことが肝要である。

人々のレジャー・レクリエーション欲求が多様化し複雑になるにつれ、個々人の力のみではその欲求を十分満たすことは難しい状況になっている。レジャー・レクリエーションは、人間の基礎的欲求を満たしていく一つの手段・方法であるのだから、そのプログラム開発は、社会の動きに十分対応できるものでなくてはならない。以下は最近のレジャー・レクリエーションプログラム開発研究の動向と基本書の紹介である。

#### I 「プログラムとは何か」

一般にプログラムという言葉がカタカナで表記され、何の抵抗もなく受け入れられているが、英語それ自体の意味としての、Program は：①プログラム、番組、番付、②予定、計画、予定表 などである。

プログラムという言葉が具体的に、学校で行われている行事それぞれの種目や出し物が順番に組まれている冊子と捉えることもできる。また、各種スポーツ大

会での種目の順番や記録が記されている冊子もプログラムとして理解できる。さらに、アメリカにおける大学や大学院の学科やコースでも、カリキュラムを示す意味でプログラムと表記しているところが見られる。このように、プログラムとは、一般的に「物事を行う上での予定・計画・予定表」などと理解されているが、必ずしもそれらの狭い領域だけではないことも知っておくべきである。

#### II 「レジャー・レクリエーションプログラムの捉え方」

レジャー・レクリエーションプログラムとは、その活動を展開するための計画とそのなかで行われる内容が何かということである。そこで行われるプログラムには、何らかの目的・目標が存在するから行われるのであって目的を持たずに計画されることはないはずである。

鈴木秀雄氏は『セラピューティックレクリエーション』講談社刊（1985年）の中で「プログラムの基本を理解しようとするとき、プログラムそのものの持つ一連のプロセスを考慮しなければならない。」と述べている。更に同氏は、レジャー・レクリエーションプログラムは、何らかの目的・目標があって実施されるのであるから、「目的（End）はその性質上、極めて理想的であったり抽象的であったりする。一方、目標

\* 東洋大学短期大学 Toyo University Junior College

(Objectives)とは具体的で、現実的で、段階的でもあり、比較的、量的な尺度をもって理解することが可能である。目的を達成するための目安として目標があり、手段が選ばれ、目標は第1目標、第2目標、第3目標というように複数・多数に及ぶ。」というのである。

レジャー・レクリエーションプログラムの目的・目標では、レジャー・レクリエーション主体が何をしたいのか、どのようなものに興味や関心があるのか、また、援助・支援する側がどのようなプログラムを提供すべきなのかなど、それぞれが目指すプログラムを具体化・明確化することが大切である。

### III 「プログラム開発の視点として」

“プログラム開発とその展開”に関する研究としては、わずかではあるが『**レジャー・レクリエーション学会の歩み**』の中からプログラム開発に関する研究を拾い上げることができる。特に、第11回学会大会1981(昭和56)年、埼玉県国立婦人教育会館では、専門分野別連続シンポジウムのなかで、「レクリエーション・プログラムの開発」をテーマにパネルディスカッションが開催されている。

また、『レジャー・レクリエーション研究』第9号'1982(昭和57)年では「レクリエーション・プログラムの開発原理に関する研究」が行われている。これらはいずれもプログラム開発の視点として、示唆に富むものである。しかし、その後の時代の変化の著しいなかで社会のニーズに十分応えられているとはいえない。

さらに、学会が編集した論理的な概説書として『**レクリエーション学の方法**』(ぎょうせい刊、1987年)があるが、これは研究分野を6分野に分類し、その一分野として「活動とプログラム」分野があり、「プログラム」についての研究を扱っている。この2点は学会における研究の動向や方法論、あるいは研究の領域を把握する上でも、入門書・基本書として読んでおきたい。

また、学会大会で発表された演題(最近5ヶ年間)のなかからプログラム開発の視点で捉えている演題を探ってみると、まず、第22回学会大会では関連の発表はなかった。第23回大会では、わずかに1題、第24回

大会で3題、第25回大会では、記念大会ということもあって、研究発表の部と実践報告の部を設けており、この時に、実践報告として21題と大変多くの報告がなされている。その中でプログラム開発を主題とする報告は9題であった。特に実践的研究では、①対象者が何を求めているのか、②プログラム計画が対象者のニーズに添って準備できたか、③計画・立案どおりに実施できたか、④終了後、反省・評価をし、次回への準備を進める。それが、実施後のプログラムの分析・評価、ひいてはプログラム開発につながるのである。このように一連の形態を作っておくことが肝要であろう。このプロセスをフィードバックしながら対象者にあったプログラムづくり・開発が行われなくてはならない。

特にプログラム開発の視点からすると、プログラムの実践と研究の融合こそが今、求められているのである。

また、今まで学校や職場、地域社会などでのプログラム開発も進められてきたが、現在の社会環境などを考えると、子どものあそび場の問題や、精神的なゆとり、心の豊かさなどの問題が、われわれの生活課題ともなっている。特に最近の傾向として、社会福祉領域のプログラム開発が進んでいるように思われる。これも社会の欲求であり、わが国の高齢化社会を如実に表しているといっても過言ではなからう。

### IV 「プログラム開発の基本書」

プログラム開発の基本的な内容としては、最初に紹介するのが、**J. Mcneil (1977年刊)の Curriculum : A Comprehensive Introduction**を紹介したい。

本書は5章の章だてをし、その第1章では、カリキュラムの総括的理解、第2章はカリキュラム開発における技術の熟練、第3章は、効果的に学習するためのカリキュラムの組織化、第4章は、カリキュラムの課題と傾向、第5章は、カリキュラム調査と理論となっている。これらのカリキュラムをプログラム開発の視点と並列させたかたちで考えると、その内容はいずれもプログラム開発の基本であり、人間の資質の向上を目指すもので、個人あるいは社会の価値観に大きく影響を及ぼすものといえよう。

具体的には：

#### I. プログラム開発における技術の熟練

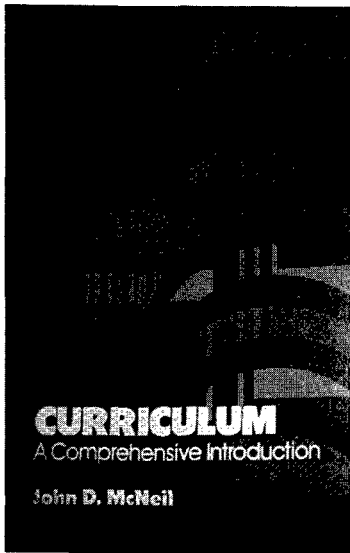


写真 1. Curriculum : A Comprehensive Introduction

- 1) プログラムの目的の決定
  - 2) プログラムの意義の開発
  - 3) プログラムの展開
  - 4) プログラムの評価
- Ⅱ. 効果的なプログラムの組織化
- 1) プログラム構成の原則
  - 2) 実行に対するプログラムの組織
- Ⅲ. プログラムの課題（傾向）
- 1) プログラムがかかえる現代的課題
  - 2) プログラムフィールド
  - 3) プログラム開発のための政策
- Ⅳ. プログラムの調整と理論研究
- 1) プログラム決定に対する各視点
    - (1)歴史的視点
    - (2)科学的視点
    - (3)合理的視点
  - 2) プログラムに対する理論的研究の方向性
    - (1)現状認識
    - (2)プログラムの理論の将来の方向性・あり方
    - (3)プログラム研究の方向性

このような考え方を基礎としており、プログラム開発に関する研究を進めようとする者にとって、大変有効な著書といえよう。

つぎに、レジャーの視点からJ.Bannon（1976年刊）のLeisure Resources: Its Comprehensive Planningを紹介する。Bannonは本書のなかで資源をどのように使うか、またレジャーサービスをどのように提供するかを中心に述べている。

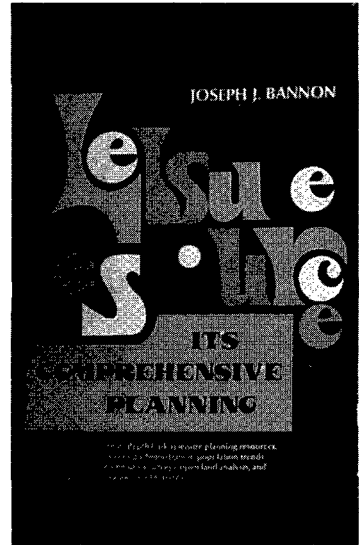


写真 2. Leisure Resources : Its Comprehensive Planning

概観すれば：

1. プランニングのプロセスの概要
2. プランニングのための組織と管理
3. 人口動態に対するプランの導入
4. 姿勢・関心に関するコミュニティーが持つ内容調査
5. オープンスペース、環境、施設
6. レジャーシステムを提供するための評価
7. レジャーサービスの組織と管理

特にここで興味深いのが、第3章で書かれている人口動態に対するプランの導入で、大都市圏と過疎におけるレジャー・レクリエーションサービスの提供の仕方、また、第5章では、オープンスペース、環境、施設など、空間の利用、都市計画（都市づくり）と施設との関係について詳述している。これらは、今の日本の現状と重ね合わせて考えると、参考になる。

さらに、A. Tillman（1973年刊）のThe Program Book for Recreation Professionals は、アメリカでは



写真3. The Program Book for Recreation Professionals



写真4. Leisure Services

レジャー・レクリエーション専門職の必読書ともいわれている。

Tillman は、この著書のなかでレジャー・レクリエーションの専門職として理解しておかなくてはならない事柄について10項目を上げている。前半の項目では社会心理学的アプローチで、レジャー・レクリエーションプログラムの動機づけや企画・計画について解説している。また後半の項目では、プログラムの展開例などの解説をしている。

参考になるので章だてを記しておく：

1. レクリエーションは生きる道である
2. レクリエーションプログラムは人々のためにある
3. レクリエーションは人々がプログラムを作る
4. レクリエーションプログラムは計画である
5. レクリエーションプログラムは援助と動機づけである
6. レクリエーションとスポーツプログラムのあり方
7. レクリエーションと社会的プログラムの方向性
8. レクリエーションと文化的プログラムの将来
9. レクリエーションスペシャルイベントの存在
10. レクリエーションの評価のプロセス

以上はアメリカにおけるレジャー・レクリエーションプログラム開発の視点からの基本書として紹介したが、わが国におけるレジャー・レクリエーションプログラム開発の基本書としては、『レクリエーション活動の実際』杏林書院（1987年刊）が、上げられる。

本書はレクリエーション指導者のための実技テキストである。レクリエーションの基礎実技といわれている内容が網羅されている。特にプログラムの企画・運営の方法、指導法や評価などは大変参考になろう。

また、『福祉レクリエーションの実践』日本レクリエーション協会編（1989年刊）も時代の要請に応えるべく刊行された一冊といってもよい。

社会福祉とレクリエーションプログラムとの関係をどのように捉えるべきか、また福祉レクリエーションの実践として、老人ホーム、身体障害者、精神薄弱者施設の紹介がされていて、種々のケースを考察できるので参考になる。

本学会の理事長である鈴木秀雄著『セラピューティックレクリエーション』（講談社刊1985、および不味堂出版刊1995）は障害の軽減・健康維持を願う人へのレクリエーションとして療育、療法、処方などの視点から解説している。しかし、レクリエーションがすべての人々に平等に保障された権利であるとするれば、介護を必要とする人だけにあてはまるものではない。プ

プログラム展開としては、カフェテリア型プログラムと処方型プログラム提供のバランスが大切だと述べ、レクリエーション主体とレクリエーション財のあり方について十分配慮をしつつ、プログラム提供をしていかなければならないと説いている。現代的レジャー・レクリエーションを理解するためにも一読に値するものである。

特にレジャー・レクリエーションが時代的背景によ

り大きく変化していくなかで、どのようなプログラムを展開・開発していくかは、レジャー・レクリエーション活動の具体化にとって大変重要な課題である。

最後に、レジャーサービスの視点から、レクリエーション組織あるいは公園システムのプログラム化について、セッサム、メイヤー、ブライトビルの共著である。**Leisure Services**は包括的なレジャー・レクリエーションプログラム開発の必読書に入るものである。